

## 郵送による討論

## 古代文学研究における今日の焦点と欠点

## 前野貞男

文献学的に考察して、この論題のもとに扱ふべき「古代文学」の時代区分を、一応、記載文学時代（即ち推古朝から奈良末期まで）と限定し、この期間に現れた文学作品を対象に討論することを提案したい。

奈良初期には古事記や日本書紀が完成しているが、これらの撰書に現れた神話・伝説・歌謡などを伝唱文学の領域に於て扱ふべきであるとする論旨には一面の理があり、その発生の本源に対しては忠実であると首肯し得るが、語部によつて承存された内容も、文字に固定されれば、記載文学としての新しい角度から見直されなければならない筈である。

これは奈良末期に成立した万葉集にも云ひ得ることであつて、ここに収められた伝誦歌は古事記の場合とは異なり、太古時代からの口碑によるものではなく、概ね文字伝来以後の所産である。併しながら、これらの伝誦歌が、語部といふ特定人物によつて伝へられたものではないにしても、誰人かの口伝によつ

て記録された事情（即ち文字に固定されるに至つた経路）は同列である。そして特定人物の手によらなかつたがために相当の異伝歌を生ずる結果にさへなつたのであるが、記載文学としての価値は、必ずしも伝唱文学の領域に追従して左右されるものではなく、それ自体の分野に於て検討を加へらるべきであらう。

このことは風土記の場合にも論及し得ることであるが、記載文学としての使命は、文字による新しい表現によつて開拓されているのであるから、この見地に立つて「時代区分」を再認識し、口伝の世界から安定した境域に導入された「文学としての形態」を改めて追究して行くといふ点に今日の課題が残されているのではなからうか。

## 青木生子

(一) 図らずも前野貞男氏によつて「時代区分」（記載文学としての云々は、今、別にして）の問題が提案されたことは、私にとつても一つの関心事である。古代文学の範囲をどこにおくか。互いの暗黙の了解の範囲で今は具体

的な研究が進められているようだが、一方でこの問題は、当然逢着せねばならぬ重要な課題であると思う。（本学会に即していえば、「上代文学」でなくて古代文学であるところの理由など）。それは、研究範囲の便宜的な打合せなどということではなく、古代文学の本質問題に当然かかわつてくるわけである。具体的詳細な研究と同時に一方で、この総合的本質的な課題を念頭におきたく思う。

本学会で、できれば共同作業のようなものが（右の何れの面であらうと）企画されれば面白いと思う。勿論長年月をかけてである。

(二) 前野氏の「記載文学」の御意見について。

古代文学では、今日しりうるものはすべて記載されたものだけである。文献学的に、記載されたものとしての意味を検討すべきとする御意見にはそれとして賛成である。だが、記載を文献的現象の面だけでいうのなら、それはすべて記載文学であつてこれを特記する必要もない。口誦と記載との区別は、むしろ文学を、発想や歴史の実態を重視する発生史の上から考えるとところに生ずる。要するに、文字による表現にあくまで即するか、発想をより重んずるかによつて分れる研究態度であると思う。ところが、古事記も万葉も記載されたものとしての面で重視する御意見だが、そこには氏も自ら口承から記載への推移

を認めていられるのは、たとえ記載されたものでも口誦されたものの記載と、記載を前提に生れたものとの区別は認めていられるわけである。私はむしろこの点を重視したい。(記載時代に入った万葉でも、当の作者がはたして記載したのか、これを目的にして作つたものか、或はそうでないものも相当あるのではないか。記載する事態に当って何らかの変更がされる場合も当然考えられる)。一方、口誦文学の問題は当然民俗学とも関連してくるので、諸氏の御意見も賜りたく思う。(前野氏の御意見をとりちがえていいる点があつたらおわびいたします)

## 太田 善麿

古代文学の研究をささえるものは、何であらうか。天才によつてすばらしく高く大きい文芸作品が制作されたり、それが深く享受鑑賞されたりすることの機制を探索するのには古代は適切な場所がらとは言えぬ。これに対し、たとい低く貧しいものではあるとしても、より多くの人々が言語活動にかかわつて、制作の体験をわかちあうという機制を探索する場所というのなら、びつたりだろう。

ところで今日、日本人が当面しつつある最も大きな課題の一つ——われわれすべてが、みずからのものをみずからの言葉によつて述

べ明かすことのできる人間になるということ、右にせよ左にせよ、特定のイデオロギーやスローガンの受け売り、口まねに満足し得ない人間になるということ——は、まことに世界的かつ当世紀的課題とも言えるのであるが、それは実は言語活動を創造的に営む主体を形成する問題であり、やがて人間を文学的に成長せしめる問題になるのである。

古代には、われわれが享受する作品としては、ささやかなものしかない。すばらしい作品を享受して自己において幸福と満足とを味わおうとする立場からは、古代は謂わば不毛の地である。しかしそうであるだけに、わたしとしては、そこに含まれている文芸産出の営みの意味がゆかしくてならぬ。

このような意識をもたねばならぬ輩の性情を、わたしは貧乏性と呼んでいる。そして、それがおのれの性ならば、それに徹してみる必要があるかとも思っている。このようなことがらは卒爾に言い出ると誤解をまねくおそれもあるが、これを措いて他に言うべきこともないような気がする。

## 伊原 昭

前執筆者諸氏が時代区分を問題にされたのは全く同感である。同じく『古代文学』と言つても研究者一人一人の意味する内容が異つ

ている現状は困りものである。これは研究者達が同じテーマに対して協力的な研究をしたことに原因があるのではなからうか。もつと学界での共同研究ということが望ましい。その例として私は一二のことを提案したい。

その一つは、多くの古代文学作品について完全な総索引が作成せられてほしいということである。現在、総索引のあるのは万葉だけであろう(古事記のは、むしろ語彙的な索引のようである)。総索引のおかげで、どれほど簡単・正確・多量に希望の資料が検索され収集されるかは論のないところである。今日の段階でこのような時間・労力・経費を要する仕事の作成を求めるとは無理かもしれぬが個人でなく学界全体から多くの研究者達が参加し、早く完全なものを作り、それによつて研究者達が個々に浪費していた力を、もつと内容に深く立ち入つた研究の方向へとふりむけたらと思う。作成の方法も、例えば、総索引では「ウネビ」「ヲ」「ヤシ」とあるが、「ヲヤシ」という説もあるわけであるから、既成の語概念で作成せず、語をバラバラにし(二音くらいづつに分解する)て新しい語解釈を立て得るような新しい視野からの『言的』索引が、今までの語彙的索引に加えて作られることが望ましい。

もう一つは、研究成果の目録、解題、紹介

等の作成についてである。現状では学会誌がそれぞれ努力をかけたながらも個々別々に不完全なものや載せ、研究者も一つのツールだけでは安心できずすべての雑誌に目を通そうとする。これも亦、学界全体で計画し協同で完全なものを作ればそれを見るだけで学界の動向を確実に知り得て研究上便である。

要するに、学界がもつと協力して共通のツールを作ることが学界の進歩を促す道ではなからうか。

### 尾崎暢 映

太平洋戦争後とくにさかんとなった方法に、いわゆる歴史社会学的方法と民俗学的方法がある。しかし、これらとても現在ではその方法一色にぬりつぶされた狭いものでなく、たとえば、西郷信綱氏あたりの論考を見ても、氏は民俗学の徒であつたかと思われるほど果敢に此の方法や成果をとりいれ、視野はひろく、観察は深く鋭くなつてきている。北山茂夫氏あたりの態度には、いつくなくともはあるが、実証的であろうとする態度は明らかに見えてゐる。民俗学畑の人のものもこの例にもれず、三谷栄一氏などのものも、該博な知見と探査の上に立つて考察が進められている。しかし何といつても記紀・万葉が古典である以上、なお文献学的方法を基礎と

し、重んずべきは当然であり、この点に力をそがねばならぬことは、今後とても変りはあるまい。この意味で、武田・沢瀉、両氏あたりの注釈の仕事は、大きな意味をもつ。それでも、諸説の集大成が個人の力でなされる以上、遺漏はまぬかれぬ。そこで、せつに望まれるのは、曾て改造社の「短歌研究」でなされたような共同研究の再開である。また同じく、曾ての岩波書店の「万葉集研究年報」のような、考説のたんねんな収集とその要旨の紹介が望まれる。かような文献学的方法にもとづき、研究者の主體的立場をまもりながら、広く他の方法・成果をも参酌して、公正な成果をうるようつとめることが望まれる。

次に言いたいのは、本文批判、音韻・語法・語彙の研究、時代史の観察等による成果をふまえた解釈によつて疑問が解決されたと思われたいものにも、なお不備や近代の合理解の指摘される場合のすくなくないことである。その欠陥を補うための一つの拠りどころとして、発想の研究に着目すべきことを提唱したい。以上の意見は全く平凡の域を出ない。それでも、前野氏以下の諸氏のそれと、すこしずつ交わるところがあらうかと思つてゐる。

### 谷 馨

一、発想に就いての研究を重視しようとする

発言に賛成である。古代人の生活感情に能ふ限りこの身を近づけてゆきたいものだと思ふ二、万葉研究は近來いよいよ微に入り細を穿つ観があるが、それだけに分解の域にとどまる弊を伴う憾み無しとせぬ。綜合を忘れては、作品に対する愛情は稀薄となり、論の格調は低まる。私は、そういう意味に於ける格調高い論考に接したい思いがしきりである。

### 鴻巣隼 雄

古代文学研究の焦点を私自身の当面している問題と結びつけて絞上げて見ると、概括的には時代区分に関する課題とでもいえそうなものがまず頭に浮んでくる。とくに古代前期末と古代後期初めをつなぐクサビの役目を何がつとめているのか、又古代後期の終末をどこに求めたらよいのか、更に口承文芸と読者文芸とが互に転換する時期をどこに置くべきか、定型詩誕生の諸契機は何かなど、大切な疑問が未解決のままになっている。

以上のような事項が把握できてこそ文芸史の時代区分が設定できるのである。そしてそれに成功するためには、すでに御意見もあるように、事実の羅列以上に、やはり発想形式に重点を置く、新しい視点が必要ではなからうか。これが胸中を去来する課題であり夢である。